

動できないからである。つまり、「信教の自由」を容認している国家の下で合法化された宗教でしか公共宗教として活動できないことになり、そもそも合法的ではない宗教は国家から排除されるのである。また、現実的に公共性は、国家によって認められて初めて存立するので、宗教と同じく国家の下にしか形成できない可能性がある。

そして、公共宗教を日本で考えると次のような特質が関連してくる。日本での公共は「公」という歴史的な拘束性があることである。つまり、公共性の歴史が浅く日本の公共が国家を表す「公」とつながりやすいため、日本での公共宗教は容易に国家宗教として意識されやすいのである。この顕著な例が「公」の神社を掲げる靖国神社問題であるといえる。それを現在抑え宗教間を共生させているのは政教分離規定である。政教分離によって国家の下に宗教が位置していることで宗教間の対立は回避されているのである。

このように公共宗教は、「信教の自由」や政教分離の規定内の中でなければ活動できない。公共領域での宗教の活動には政治的な妥協が求められることになる。そしてこのような中で、では何故宗教なのか、特に何故市民社会的な公共宗教なのかは依然として解けないのである。なおそれでも公共宗教の可能性があるとすれば、諸宗教（あるいは諸宗教間）の対社会的な活動を通して日本の国家の枠組み内で新たな一つの公共性を生む可能性にある。例えば、千鳥ヶ淵戦没者墓苑での諸宗教が営むような慰霊祭の形である。

しかし、翻って考えてみると、例えば行基の社会活動のよう

に、宗教は国家が行いえないものを代わりに行ってきたという伝統がある。つまり、公共宗教は伝統的に存在してきたのである。現代、公共宗教がいわれているのは、近現代社会が宗教を排除し、私事化し宗教の活動を等閑視してきたからだともいえるが、もう一度宗教活動の再確認が必要だと考える。

宗教概念にまつわる言説空間

——現代日本の場合——

近藤 光博

本発表は、現代日本における宗教概念の言説論的布置のモデル化をおこなうことで、《ポスト宗教概念批判の宗教学》の構想という課題への示唆を得ようとした。

①まず宗教概念とその周辺に形成される言説空間を確認した。具体的には、「宗教」という語のことも顕著な意味内容が教団、主として「新興宗教」を指すこと。そこには、犯罪行為や「狂信」といった社会的に評価されない事柄との強い観念連合があること。一方、「宗教」という語が肯定的な価値をもつ場合として、一人ひとりの内面性の純化／立てなおしや日常規範の確立が優先していることなどを確認した。

②古代史の文脈における「宗教的儀式」という表現に注目した。そこから、古代人が執り行う儀礼そのものとしての《宗教的なもの》という観念を抽出した。

第1部会

③次に、世俗概念の不在、およびその代替概念の不在を指摘した。これは、宗教概念との対比で、社会問題への取り組みのために参照され、公的な空間を維持する、現代的なものの観念には特定の語が与えられておらず、世俗概念はその役割を担うにはいたっていないことを意味する。そして、(a)「科学」「理性」「合理性」、(b)「ふつう」「常識」、(c)「経済」などの語も同様であることが確認された。

④さらに、現代日本の言説空間において、「宗教」や「世俗」の語の観念包接力がおよぼ範囲はきわめて狭小で、その《あいだ》の空間がほとんどであることを確認した。その分析として、《文化慣習》(占い、年中行事/イベント)、《スピリチュアル》、《ファンタジー》(童話、小説、マンガ、映画)、《宗教代替機能》(ナシヨナリズム、恋愛、芸術体験)という実体的な分類をまず示した。その上で、そこに言語存在論的な位相を見いだした。具体的には、(a)不気味なもの/非日常的なもの/非現実的なもの、(b)高度に抽象的なもの、すなわち理念、理想、価値、(c)比喩、(d)激情あるいは狂気を抽出した。これらの要素は、宗教/世俗の二分法を回避した、あるいはそれに回収されえない人間存在の諸要素のはたらきを強く想定させるとともに、「宗教」「世俗」という二つの語それぞれの周辺に形成される《重力場》にもはたらいていることを確認し、ある種の世界観の構築に資する可能性があることを指摘した。

⑤最後に、三つの示唆をおこなった。すなわち、(a)宗教概念の使用と観念包接力に関する、実証的な研究がおこなわれるべきである。宗教概念は観念上の構築物であるだけでなく、実

生活において流通し、既存の言説II制度的な秩序(権力)をささえる具体的な語でもある。今、この状態にこそ注目すべきである。(b)《「世俗」の宗教学》の確立が急務である。宗教/世俗の二分法は、現時点で極度に観念的なレベルにとどまっている。歴史的な文脈のなかでそれを跡づけていく必要がある。(c)《宗教と世俗のあいだ》に関する研究が促進されるべきである。必須なのは個別具体的な文化事象の研究であるが、そこには、言語存在論的な、それゆえある種の普遍性をもった世界観(人間と社会と歴史に関する包括的理解)の構想、少なくともそれへの視線がともなわねばならない。なぜなら、要請されているのは、実際に通用しているII支配的な言説構造(モダニズムとポストモダニズムとポストモダニズム批判の全て)への批判だからである。——これらの道筋を丁寧に踏査することで、《ポスト宗教概念批判の宗教学》は分析と批判の可能性をあらたにすることができよう、と結論づけた。